〔東京家政大学研究紀要　第47集 (1), 2007, pp.169～176〕

成人女性の生きがいに関する生涯発達心理学的研究 Ⅲ
―女性の生き方の理想と実際―

井上 俊哉*, 井森 澄江**, 西村 純一***, 大井 京子****

(平成18年10月5日受理)

Life-span Development Psychological Study of the Purpose in Life among Adult Women Ⅲ :
Ideal and Reality of Women's Life Courses

INOUE, Shunya IMORI, Sumie NISHIMURA, Junichi and OOI, Kyoko

(Received on October 5, 2006)

キーワード：生涯発達心理学，女性，生き方，結婚，仕事
Key words : life-span-development psychology, women, life course, marriage, job

1 問題と目的

近年の日本における産業構造，人口動態の急激な変容は，日本人に，男性女性を問わず，その生き方，生きがい，職業，家庭のあり方等の再考を迫っている（柏木2003[1]）．特に女性においては，高学歴化もともなって，男性に先んじて生き方の転換が生じていると考えられる．また，この転換期である現在，年代・世代・育った家庭・受けてきた教育によりその意味付けは多様なものになっていることが予想される．本研究は，女子大学，短期大学（旧制高等専門学校を含む）を卒業した成人女性について，理想の生き方と実際の生き方の様相を様々な角度から探っていこうとするものである．

女性の生き方については，西村らが1988年（第1次調査936名），1993年（追跡研究233名）に行った女性の就労パターンに関する時系列的研究の中で，女性の理想ライフコース選択の問題として取り上げている（東京都生活文化局,1990[2]；東京女性財団，1994[3]）．西村らの研究は，男女雇用機会均等法や改正労働基準法の施行直後の1987年度に採用された東京都内に勤務する女性を対象として行われており，理想のライフコースを，結婚や出産にかかわりなく仕事を続ける「仕事継続コース」，結婚もしくは出産によって仕事をやめ，子育て後再就職する「再就職コース」，結婚もしくは出産によって仕事をやめ，その後は働かない「後半無職コース」の3つに分類している．そして，就職直後の第1次調査では再就職コースが43.6%，仕事継続コース34.2%，後半無職コース22.2%であったのが，5年後の追跡調査では，再就職コースが増加し（54.7%）仕事継続コース（30.2%）,後半無職コース（15.1%）が減少したことを示している．5年の間の仕事の変動（転職，離職，継続）とのクロス分析においても，仕事の変動の如何にかかわらず，再就職コースを理想のライフコースと捉える人が過半数であることも示されている．

西村らの研究では，主に20代の就労女性の生き方とその5年後の変化を，男女平等意識や希望する昇進の型などとの関係の中で分析しているが，本研究では，対象を就労女性に限定せず，大学を卒業した20代から80代までの幅広い世代の成人女性の生き方について検討していく．

2 方法

調査対象：首都圏のＡ女子大学，短期大学（旧制高等専門学校を含む）同窓会名簿から無作為抽出された4,200名

＊　教養部情報処理研究室
＊＊　文学部心理教育学科発達心理研究室
＊＊＊　文学部心理教育学科老年心理研究室
＊＊＊＊　文学部心理教育学科資料室

調査時期：2004年10月～12月

調査法：郵送法

有効回収数：979名（回収率23%）

質問紙の概要：フェイスシート（年齢，職業，結婚の有無，子どもの有無，きょうだいの有無，同居の家族，現在の健康状態，育った環境，子どもの頃の母親の就労形態等）のほか，Q1「結婚，親になるなどのライフイベントが生じるのにふさわしいと考える時期」（10項目），Q2「理想の生き方」，Q3「実際の生き方」，Q4「夫婦関係」（12項目），Q5「現在の愛着（IWM尺度）」（18項目）と「就学前の母子関係」（9項目），Q6「親の養育態度（PBI）」（25項目）と「青年期の親への愛着（IPA）」（28項目），Q7「親と自分との関係」（21項目），Q8「老いてくる親への世話についての態度や気持ち」（28項目），Q9～Q14「自分自身や親の高齢化に伴う意識・生活に対する希望」，Q15「幸福な老いについての考え」，Q16～Q18「生き甲斐」，および子育て経験者のみに回答を依頼した「自分自身の子育て行動・感情」に関する3項目からなる．本研究では，Q2「理想の生き方」，Q3「実際の生き方」を中心に分析をおこなった．

3 結果

3.1 基礎集計

フェイスシート，質問紙に含まれる，結婚，子ども，仕事に関わる項目を取り上げて，集計をおこなった．

年齢構成は，20代が101名，30代120名，40代153名，50代131名，60代186名，70代209名，80代47名（90代1名を含む），年齢無回答32名である．世代ごとに，未婚者，既婚者（離別・死別を含む）に分け，それぞれに該当する人数を表1にまとめた（既婚者については子どもの人数別に集計してある）．

職業については，12個の選択肢を用意して回答を求めたが，ここでは，「管理的職業」「事務的職業」「専門的・技術的職業」「販売サービス的職業」「保安サービス的職業」「技能的・労務的職業」を選択した人を「有職者」としてまとめた．世代ごとの有職者と専業主婦の割合は表2の通りである．未婚者が大多数である20代（101名中71名）では84%が職業を持っており，そのほかの世代では40代に有職者が多い．

表2 有職者・専業主婦の割合

世代	有職者	専業主婦
20	84%	9%
30	45%	36%
40	55%	22%
50	28%	36%
60	11%	54%
70	7%	51%
80	6%	38%

3.2「理想の生き方」に関する分析

3.2.1 全体

結婚・子育て・仕事をめぐる女性の生き方について「あなたは，理想の生き方として次のどれがよいと思いますか」（「理想の生き方」），「あなたの生き方は，実際どれにあてはまりますか」（「実際の生き方」）という質問項目を用い，9個の選択肢（両質問項目に共通）の中から1つを選ぶ形式で回答を求めた（選択肢は表3を参照）．

生き方の「理想」と「実際」について得られた回答を表3および図1にまとめた．「理想の生き方」に関しては，回答者全体の32%にあたる309名が「子どもが小さいうちは家にいて，大きくなったら常勤で働く」，225名(23%)が「結婚し子どもが生まれても中断しないで

表1 各世代の未婚者数・既婚者数（子供の人数別）

世代	未婚	既婚(離別・死別を含む)							無回答	計
		0人	1人	2人	3人	4人	5人	6人		
20	71	15	8	5	1	0	0	0	1	101
30	21	14	24	42	11	4	0	0	4	120
40	8	10	20	64	37	1	0	0	13	153
50	3	4	13	64	30	6	1	0	10	131
60	7	6	23	86	41	2	1	1	19	186
70	12	5	20	106	40	2	1	0	23	209
80	4	0	5	15	15	4	0	0	4	47
計	126	54	113	382	175	19	3	1	74	947

表3 生き方の理想と実際

	理想		実際	
卒業後、仕事にはつかず、結婚する	8	1%	81	8%
結婚したら仕事をやめて専業主婦になる	70	7%	171	17%
結婚して子どもが生まれたら仕事をやめて専業主婦になる	128	13%	94	10%
子どもが小さいうちは家にいて、大きくなったらパートタイムで働く	179	18%	142	15%
子どもが小さいうちは家にいて、大きくなったら常勤で働く	309	32%	72	7%
結婚せず仕事一筋に働く	4	0%	49	5%
結婚しても子どもはつくらず共働きで暮らす	5	1%	13	1%
結婚して子どもが生まれても中断しないで働く	225	23%	197	20%
その他	30	3%	118	12%
無回答	21	2%	42	4%
計	979	100%	979	100%

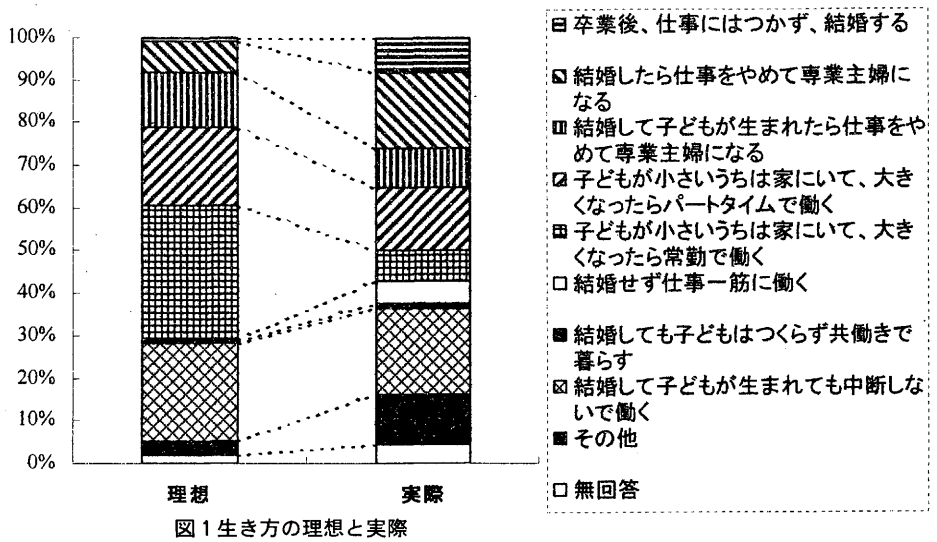

図1 生き方の理想と実際

働く」と回答している．「卒業後，仕事にはつかず，結婚する」は8名(1%)，「結婚したら仕事をやめて専業主婦になる」は70名(7%)に過ぎず，働くことへの意欲の強い回答者が多い．ただし，「結婚せず仕事一筋に働く」は4名(0.4%)「結婚しても子どもはつくらず共働きで暮らす」は5名(0.5%)しかおらず，仕事と家庭生活の両立を理想とする姿が浮かび上がる．

3.2.2 世代別

20代から80代の世代ごとに，「理想の生き方」の構成比を示した(図2)．

「卒業後，仕事にはつかず，結婚する」ことを理想とする回答は，50代以下では皆無である．「結婚したら仕事をやめて専業主婦になる」ことを理想とする人の割合がもっとも高いのは80代，ついで70代と続く（それぞれ，17%，10%）が，意外なことに，これらの世代についで比率が高いのは20代だった(9%)．20代は，子どもが大きくなってから働くのに常勤ではなくパートタイムを望む人が多いこと，「子どもが生まれても中断しないで働く」ことを理想とする人が少ないなど，社会への進出よりも家庭を重視する方向に回帰しているように見える．

西村らは，本研究の「理想の生き方」質問とよく似た「理想のライフコース」質問への回答をもとに，「仕事継続コース」「再就職コース」「後半無職コース」という分類を行っているが，西村らの調査対象が20代の就業者が中心であったこともあり，選択項目が多少異なっている．そこで，本研究では，西村らを参考にしつつ若干の変更を加え，「卒業後，仕事にはつかず，結婚する」「結

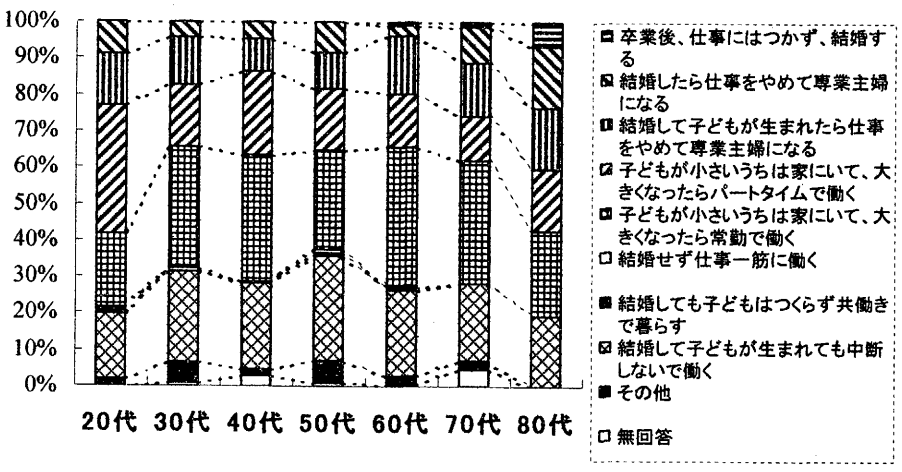

図2 世代ごとに見た「理想の生き方」

表4 世代別の理想のライフコース

世代	専業主婦	仕事復帰	仕事継続	そのほか	計
20	23%	55%	20%	2%	100%
30	18%	50%	26%	6%	100%
40	14%	59%	25%	2%	100%
50	18%	45%	31%	6%	100%
60	20%	53%	25%	2%	100%
70	27%	48%	22%	3%	100%
80	40%	40%	19%	0%	100%

婚したら仕事をやめて専業主婦になる」「結婚して子どもが生まれたら仕事をやめて専業主婦になる」を併せて「専業主婦コース」,「子どもが小さいうちは家にいて、大きくなったらパートタイムで働く」「子どもが小さいうちは家にいて、大きくなったら常勤で働く」を併せて「仕事復帰コース」,「結婚せず仕事一筋に働く」「結婚しても子どもはつくらず共働きで暮らす」「結婚して子どもが生まれても中断しないで働く」を併せて「仕事継続コース」として，世代別に集計した（表4）（全世代を通じての各コースの人数は，「専業主婦」199名，「仕事復帰」475名「仕事継続」227名であった）.

「仕事継続」コースの比率が最も高いのは50代(31%),「仕事復帰」と併せて仕事を理想のライフコースの中心におく人の割合が最も多いのは40代（84%）である．40代は実際に仕事をしている人の割合も高く（表2参照），また「専業主婦」タイプを理想とする人の割合が最低（14%）であるなど，家庭にとどまることをよしとせず，社会に出ることを理想とする女性が多い世代だといえる．男女雇用機会均等法の施行前後に就職した人は，今回調査の時点で40歳前後になっており，10代後半から20歳ごろにかけての時期の世相・社会風潮が理想の形成に影響している可能性が考えられる．また，西村らの研究の回答者の多くは現在40代を迎えているが，西村らの追跡調査時点における再就職コース54.7%，仕事継続コース30.2%，後半無職コース15.1%という数字は，今回のデータにおける40代の仕事復帰59%，仕事継続25%，専業主婦14%とかなり近い値であることも注目される．

3.2.3 「理想の生き方」と結婚

結婚により「理想の生き方」が影響を受けるかどうかを見るために，未婚者（133名）と既婚者（701名）における回答の構成比を比較したが，両群の間に大きな違いは見られなかった（図3）.

質問紙のQ4は，配偶者との関係を問う12項目から構成されている．これら12項目のうち「夫は私に依存しすぎている」「私は夫に依存しすぎている」の2項目を除く10項目（「私たちは，申し分のない結婚生活を送っている」「私と夫の関係は，非常に安定している」など）の主成分分析をおこなったところ，第1固有値7.65，第2固有値0.51となり，1次元性が高いことが確認されたので，10項目の合計点を夫婦関係良好度尺度として用いることにした．尺度の得点範囲は，10点から60点で，得点が高いほど夫婦の関係は良好であると判断できる（上記のような項目のそれぞれに対して，「全くあてはまらない=1点」「あてはまらない=2点」「どちらかといえ

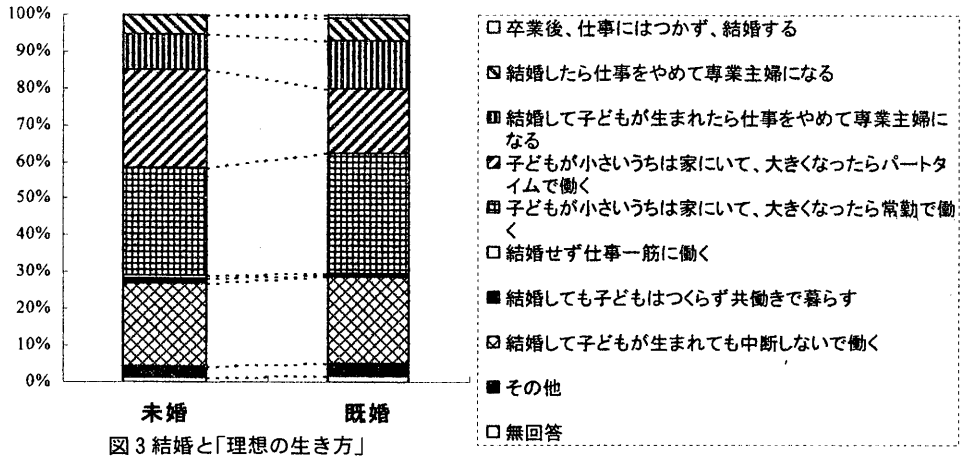

図 3 結婚と「理想の生き方」

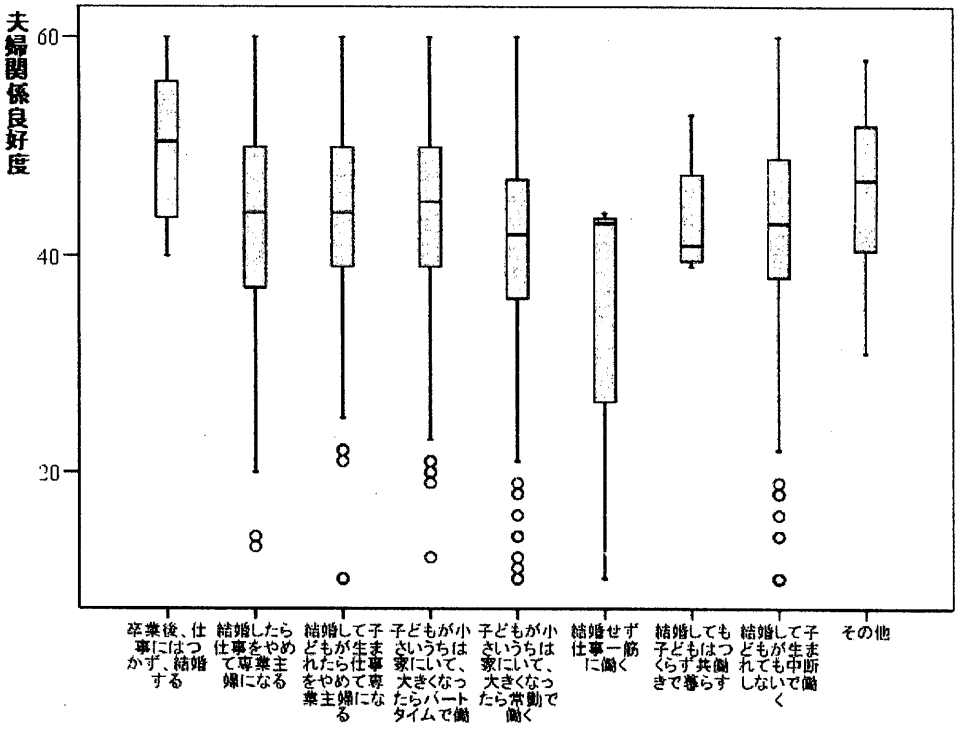

図 4 理想の生き方と夫婦関係

ばあてはまらない=3点」「どちらかというとあてはまる=4点」「あてはまる=5点」「非常によくあてはまる=6点」というように点を与えてある). 図4は,「理想」の生き方の9個の選択肢のそれぞれを選んだ人について夫婦関係良好度の得点分布を箱ひげ図で示したものである. 9群の平均値差は有意ではないが, たとえば,「卒業後, 仕事にはつかず, 結婚する」と答えた人はおおむね夫婦関係が良好であること,「子どもが小さいうちは家にいて, 大きくなったら常勤で働く」と回答した人の中には夫婦関係があまり良好ではない人がいることなどを読み取ることができる.

3.2.4「理想の生き方」と子どもの頃の母親の就労形態

フェイスシートで「子どもの頃の母親の就労形態」を問うているので, この項目への回答を利用して, 子ども

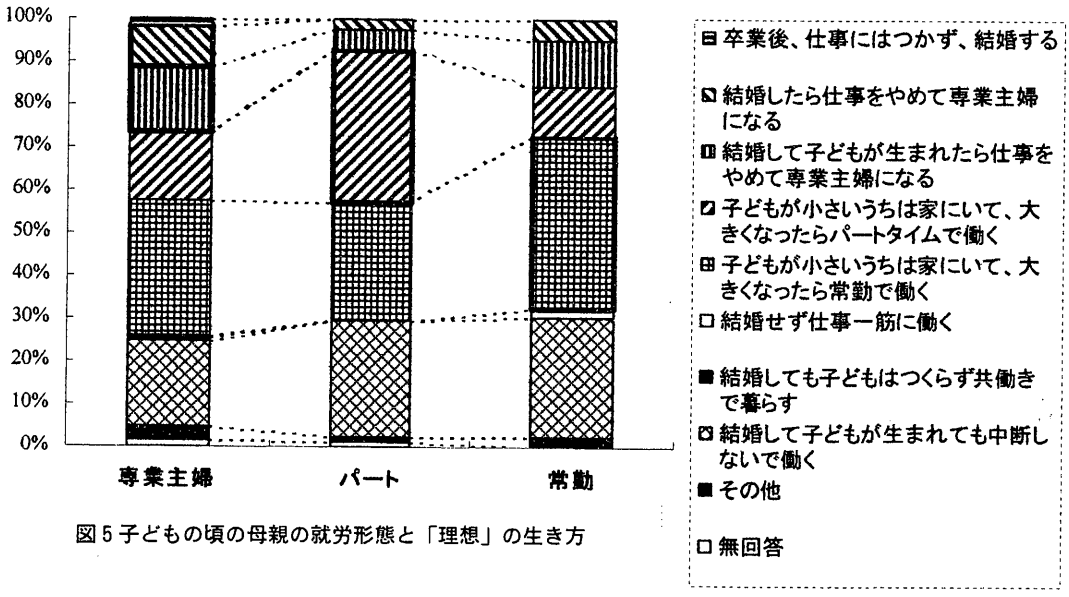

図5 子どもの頃の母親の就労形態と「理想」の生き方

表5 生き方に関する理想と実際の不一致

		実際										
		卒業後、仕事にはつかず、結婚する	結婚したら仕事をやめて専業主婦になる	結婚して子どもが生まれたら仕事をやめて専業主婦になる	子どもが小さいうちは家にいて、大きくなったらパートタイムで働く	子どもが小さいうちは家にいて、大きくなったら常勤で働く	結婚せず仕事一筋に働く	結婚しても子どもはつくらず共働きで暮らす	結婚して子どもが生まれても中断しないで働く	その他	計	理想実現率
理想	卒業後、仕事にはつかず、結婚する	8	0	0	0	0	0	0	0	0	8	100%
	結婚したら仕事をやめて専業主婦になる	11	31	5	4	3	1	0	6	7	68	46%
	結婚して子どもが生まれたら仕事をやめて専業主婦になる	12	40	36	11	4	2	1	8	10	124	29%
	子どもが小さいうちは家にいて、大きくなったらパートタイムで働く	12	26	16	59	7	8	1	7	31	167	35%
	子どもが小さいうちは家にいて、大きくなったら常勤で働く	20	56	26	51	43	21	3	55	29	304	14%
	結婚せず仕事一筋に働く	2	1	0	0	0	1	0	0	0	4	25%
	結婚しても子どもはつくらず共働きで暮らす	0	0	1	0	0	2	1	1	0	5	20%
	結婚して子どもが生まれても中断しないで働く	11	14	9	12	15	13	6	114	27	221	52%
	その他	1	2	0	4	0	0	1	5	13	26	50%
	計	77	170	93	141	72	48	13	196	117	927	

の頃母親が専業主婦だった450名，パートタイムであった84名，常勤だった121名の別に，「理想の生き方」の構成比を求めた（図5）．子どもの頃の母親と同じ就労形態が理想として選ばれやすくなる傾向が見られ，生育環境が「理想の生き方」観の形成に影響している可能性が示唆される．

3.3「理想の生き方」と「実際の生き方」の不一致

表5は，生き方に関する「理想」への回答を行に「実際」への回答を列にとり，連関表にまとめたものである．左上から右下にかけての対角線には，「理想」と「実際」が一致している人数が示される（表中太字）．理想として選ばれた各選択肢（表の各行）について，「理想」と「実際」が一致した人数をその選択肢を選んだ合計人数で割ったものを理想実現率と呼ぶこととし，表5の一番右の列に示した．理想実現率が目立って低いのは，「子どもが小さいうちは家にいて，大きくなったら常勤で働く」という選択項目で，実現率は14%に過ぎない．「理想」としてこれを選択した人の多くが「実際」としては「結婚したら仕事をやめて専業主婦になる」「子どもが小さいうちは家にいて，大きくなったらパートタイムで働く」「結婚し子どもが生まれても中断しないで働く」と回答している．表には示されていないが，40代のみを取り出した分析によると，「子どもが小さいうちは家にいて，大きくなったら常勤で働く」ことが理想であると回答した53人のうち実現しているのはわずかに4人で（理想実現率8%），「実際」としては19人が「子どもが

小さいうちは家にいて，大きくなったらパートタイムで働く」を選択している．一度仕事をやめて常勤職に戻ることの難しさがうかがわれる．

そのほかでは，「結婚して子どもが生まれたら仕事をやめて専業主婦になる」ことを「理想」としていても，「実際」には「結婚したら仕事をやめて専業主婦になる」人が多いことも目につく．

4 まとめ

20代から80代にわたる幅広い世代の成人女性に「理想の生き方」について質問した．その結果，「子どもが生まれても仕事を続ける」「子どもが小さいうちは家にいるが，大きくなったら（常勤またはパートタイムで）働く」という回答がかなりの割合を占め，働くことを「理想の生き方」の重要な要素と考える女性が多いことが認められた．だが，「結婚せずに仕事一筋」を理想とする女性はきわめて少数であり，「仕事 ⇒ 子どもがうまれたら家で子育て ⇒ 子どもに手がかからなくなったら仕事（常勤職）」 というライフコースを理想と考える女性がもっとも多い．こうした傾向はどの世代にも見られるが，40代において顕著であった．

20代の9%が「結婚したら仕事をやめて専業主婦になる」と回答していることも注目される．9%という数字はかならずしも大きな値ではないが，60代を除くと若い世代ほど選択率が下がっており，30代では4%であることを考えると，やはり目立つ数字である．「女性は家に」という伝統的な家族観への回帰が生じていると見ることもできるし，あるいは昨今のニート（NEET）問題の文脈から検討すべきなのかもしれない．

フェイスシート・質問紙に含まれる変数の中から，「理想の生き方」観の形成に影響する変数を探索した．その結果，関連のありそうな変数として，「夫婦関係の良好さ」や「子どもの頃の母親の就労形態」が見いだされた．

「理想の生き方」と「実際の生き方」が個人において一致しているかどうかを検討した結果，とくに目立ったのは，「子どもが小さいうちは家にいて，大きくなったら常勤で働く」を理想と考えながら，それが実現できないという不一致であった．「外で働く」ことと「内を守る」ことを両立させたいという現代女性の「理想」と，理想の実現を阻む「現実」を読み取ることができるだろう．

最後に，用いたデータや質問項目の持つ制約を列挙しておく．

- ある特定の女子大学の卒業生から得られたデータであり，日本の女性全般への一般化には留保が必要である．とくに女性の大学進学が少数だった高齢世代については，同世代の女性を代表するデータとは言えないかもしれない．
- 観察された世代差には，（生物学的・心理学的）加齢の影響と社会時代的背景の影響が混在している．したがって，見いだされた世代の特徴は，調査時点（2004年）におけるその世代の特徴と解釈されなければならない．
- 「実際の生き方」への回答については，回答者の現在の状況によっては選び得ない選択肢がある．たとえば，まだ子どもがいなかったり幼かったりする人にとっては，「子どもが生まれたら…」「子どもが大きくなったら…」という選択肢は意味をなさない．
- 同じ項目であっても，70，80代の人が回顧的に回答するのと，若い世代が将来展望しながら回答するのでは意味が違っている可能性がある．

引用・参考文献

1）柏木恵子（2003） 家族心理学 －社会変動・発達・ジェンダーの視点－ 東京大学出版会.
2）東京都生活文化局（1990） 女性の就労パターンに関する時系列的研究報告
3）東京女性財団（1994） 均等法パイオニア女性はいま －女性の就労パターンに関する時系列的研究－

Abstract

A questionnaire survey was conducted to Japanese women with ages ranging from the 20's to the 80's and 979 completed questionnaires were obtained providing detailed information on a wide range of lifestyle attitudes, such as on child-rearing, work and their old age. In this study, we analyze those items with a focus on "ideal life course." We found that a large proportion of women consider "work" as one of the important factors in their ideal life courses. However, it is revealed that most women tend to choose both the family life of having children and work as their ideal life, rather than only working. This tendency is significant particularly for the group in their 40's, who typically wish to "stay home to rear children and go back to work full time when their children have grown up." Nevertheless, the proportion of them who have actually achieved this ideal is extremely low (8% for the 40's group). It seems that once women quit their job after getting married or giving birth, it will be very difficult for them to return to work again. It is also worthy of notice that the proportion of women in their 20's whose ideal is being a full-time housewife is increasing.